

もくじ

学会各賞受賞者の言葉	20
Best Reviewer Award 受賞者の言葉	25
第 80 回大会(名古屋市立大学)優秀発表賞受賞者の言葉	26
第 81 回大会(長崎大学)報告	28
第 82 回大会(東都大学)案内(第 1 報)	30
編集後記	31

■学会各賞受賞者の言葉

「日本生理人類学会賞を受賞して」

青柳潔(長崎大学)

令和 2 年(2020 年)10 月 24 日、81 回大会(田井村明博大会長)において栄誉ある学会賞を賜り、誠に光栄に存じます。安河内朗学会長ならびにご推薦頂いた会員の皆様にこころより感謝申し上げます。



写真 記念の盾を持たれた青柳先生と賞状

私が本学会に入会したのは、私の前任である竹本泰一郎先生が 42 回大会を長崎で開催された 1999 年になります。20 年近く本学会にお世話になってきました。

この間、2005 年 5 月には長崎にて 53 回大会を大会長として開催させて頂きました。佐藤方彦先生の討論司会で、フォーラム「生理人類学とネアンデルタール」を行い、赤澤威先生に「ネアンデルタルの正体」の演題で講演頂いたことが懐かしく思われます。

2014 年には日本生理人類学会論文大賞を受賞させて頂きました。JPA には、これまで 15 本の論文が掲載されました。最初に掲載された論文は、2002 年に掲載された「[Body mass index, physical activity, dietary intake, serum lipids and blood pressure of middle-aged Japanese women living in a community in the Goto archipelago. Ohmura S, Aoyagi K, et al.](#)」です。本土に比べ死亡率が高い離島(長崎県

五島列島)在住女性を対象に体格、身体活動、食事、血清脂質、血圧の調査をし、日本人サンプル(国民栄養調査)と比較しました。離島の肥満女性では血清コレステロールと拡張期血圧が高くなっていました。その後、生活習慣病の疫学研究を中心に論文を作成してきました。最新では「[Individual variations and sex differences in hemodynamics with percutaneous arterial oxygen saturation \(SpO₂\) in young Andean highlanders in Bolivia](#)」が出版されました。アンデス高地在住者の酸素飽和度の個人変動と性差に関する論文です。

今後も生理人類学研究に邁進し、学会の発展に貢献できたらと思っています。

「日本生理人類学会賞を受賞して」

井上芳光(大阪国際大学)

このたびは荣誉ある学会賞を賜り、誠に光栄に存じます。安河内会長をはじめ理事の先生方、ご推薦いただきました学会員の皆様に心より感謝申し上げます。

今回の受賞理由として、理事として本学会の運営に尽力したこと、2010年に大阪国際大学で[第62回大会](#)を運営したこと、温熱生理学領域に関わる生理人類学的研究を推進したことが挙げられました。

私がこの学会に初めて参加・発表させていただきましたのは、1992年の大阪市立大学での大会でした。その後は古賀先生(神戸芸術工科大学)や綿貫先生(九州大学)から声をかけていただき、奈良やソウルでの国際学会・会議で発表する機会をいただきました。大舞台での発表経験の乏しかった私としては、貴重で励みになる経験でした。その後、生理人類学会が大きな発展期であった2004年からは春・秋の学会には必ず参加・発表するように心

がけました。私も2006年から2018年まで理事会メンバーとして、研究部会、研究助成、財務、倫理を担当させていただき、学会運営のイロハを学ばせていただきました。その折に一緒に担当させていただきました先生方から、多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

62回大会を開催させていただいた折には、多くの先生方や学生の協力をいただきました。特別講演では栃原先生(九州大学)に「日本人の入浴」をお話いただき、高温湯浴を好む日本人の入浴スタイルが人体に及ぼす影響について、その利点と問題点を生理人類学的視点からお話いただいたことを思い出します。シンポジウムでは近藤先生(神戸大学)を中心に「ヒトとしての身体機能調節の特徴ー他の動物との比較からー」を企画いただき、新進気鋭の先生方の発表に圧倒され、私自身も大きな刺激を受けました。

自分の研究テーマは「老若男女の発汗能力」で、ヒトの発汗能力がどのように発達・老化し、それに性や運動トレーニングがどのように影響するのか、検討してまいりました。これらの成果は、環境省熱中症環境保健マニュアルや日本スポーツ協会熱中症予防ガイドラインに盛り込まれ、熱中症予防のための基礎知識として少しは一般の方々に還元できたのではないかと思います。これらの研究は、2004年以降から大型科研費が採択されて研究施設を整備できたことで大きく推進できました。これも生理人類学会の先生方の熱心な働きかけで科研費に生理人類学の細目が開設されたことに、大きく関連していたことは言うまでもありません。生理人類学の細目開設にご尽力いただきました先生方に感謝申し上げます。さらにこれらの研究は、国内外の多くの研究者や卒業研究の

学生の協力により実施することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

最後に生理人類学会の益々の発展を祈念いたしております。今回は本当にありがとうございました。

「優秀研究賞を受賞して」

村木里志(九州大学)

この度は、優秀研究賞という栄誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。選考委員の方々をはじめ学会関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。また、これまでの研究活動を支えて下さった皆様に深く感謝申し上げます。

私はこれまで高齢者や身体障がい者の身体運動やそれを支える機能を特に生理の面から研究を進めてきました。特に基礎研究を社会に活かすことを心がけ、そのため実験室実験のみならずフィールド実験・調査の両方に取り組んでいます。今回、受賞理由としてそのことも評価頂き、大変嬉しく存じます。今後はこの受賞を励みとして、一層、研究活動に精進し、生理人文学の発展に貢献したいと思えます。

また、今回選考頂いた理由として、和文誌([日本生理人類学誌](#))を編集委員長、副編集委員長として長年編集してきたこともあるのではと思っています。しかし、それも多くの皆様に支えられてきたからこそ役目を務めることができたと思います。当時の編集委員の皆様、投稿者の皆様、査読に協力して頂いた皆様、読者の皆様を始め、和文誌に関わって頂いた全ての方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

[研究室\(九州大学福祉人間工学研究室\)のWeb サイト](#)もご覧ください。

「優秀論文賞を受賞して」

甲田勝康(関西医科大学)

JPA 掲載論文「[Associations between serum levels of insulin-like growth factor-I and bone mineral acquisition in pubertal children: a three-year follow-up study in Hamamatsu, Japan](#)」の共著者を代表して、優秀論文賞という過大な評価を頂いたことを、日本生理人類学会の関係者の皆様に御礼申し上げます。

本論文は、一般住民を対象とした疫学論文です。私は 30 年以上に亘って疫学研究を続けてきましたが、疫学仲間では「我々のやっているような疫学は、ノーベルに最も遠い分野ですね。」と冗談交じりに話します。何故なら疫学研究では、その後の科学の方向性を大きく変えるような重大な新発見がほとんど無いからです。疫学研究の多くは、ほとんどの人が「たぶんそのように感じている」ことを、具体的な文章に表現を改めて、それを証明することが目的です。ですから、新発見の可能性は、他の基礎研究よりもはるかに少なくなります。文学には、文字(行)と文字(行)の間の空白を読者に読ませる面白さがありますが、疫学はその空白を文字で埋めていくような地味な仕事です。このような仕事には、ロマンを感じないという方もおられると思います。しかし、疫学には疫学ならではの魅力があります。人の身体に於いて、ある生体反応(疾病も含みます)を起こしている原因は一つではありません。多くの要因が複雑に絡み合ってパスウェイを作り、生体影響が決定されます。それらの要因は個体の中に存在するだけでなく、個体周囲の環境中にも存在し、それぞれの要因が影響しあっています。そして、どれが主因でどれが傍因かも、よく判りません。多分そうだろうとは言えるのですが明らかにするのは難しいのです。そこで大切になる

のは、何が原因か、よりも、どんな要因があるのか、どの要因が強いのか、要因の同定と作用の強さと、影響の大きさの把握です。これに挑戦しているのが分析疫学です。

分析疫学の目的は、因果推論によって要因の作用の強さと影響の大きさの根拠(エビデンス)を科学的方法によって示すことです。因果推論の最も単純で確実な方法には、治療薬の開発で用いる無作為割付比較試験があり、これは介入研究の一つです。しかし、人を対象とした介入研究には様々な倫理的問題や社会経済的な問題が生じます。そこで多くの疫学研究は介入研究ではなく、観察研究として実施されています。観察研究では人為的な介入は行わず、ただその場に起きた事やこれから起きる事を観察します。ちなみに喫煙と肺がんの因果関係は観察研究によって明らかにされました。しかし、観察研究では様々な交絡因子の存在によって真の結果が歪められます。交絡因子とは説明変数(因子)と結果変数(因子)の両方に関係する因子のことで、交絡因子が結果変数に直接影響することで説明変数の結果変数への影響が歪められてしまいます。このような交絡因子の存在を如何に制御して因果推論を導くのが疫学研究者の腕の見せ所です。この点が疫学の面白さであり楽しさといえます。

今回、優秀論文賞を頂いた上記論文は、浜松市の一地域に在住する児童生徒を追跡して血中の insulin-like growth factor-I と全身骨塩の獲得量との関係について観察研究を用いて検討したものです。小児の発育期は、環境適応能や生理的多型性に関わる重要な時期で、本研究はその基礎的データの一部を明らかにしたことを評価して頂いたものと思っています。最後になりましたが、今後の生理人類学のま

すますのご発展をお祈りして、ご挨拶にかえさせていただきます。誠にありがとうございました。

「論文奨励賞を受賞して」

大上安奈(東洋大学)

この度は、日本生理人類学会誌に掲載されました論文「[高齢者における膝伸展運動時の大腿動脈血流応答](#)」に対して、論文奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文を推薦して下さいました皆様に心より感謝申し上げます。

本論文は、大阪国際大学の井上芳光先生のご指導のもと、研究室の学生さんのご協力を得て行なった実験のデータをまとめたものとなります。また、この実験を遂行するにあたり多くの方々に快く被験者をお引き受け頂きました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。高齢者における体温調節能(皮膚血管拡張能や発汗機能)の低下は、加齢に伴う循環調節に応じた変化と考えられており、下肢→躯幹後面→躯幹前面→上肢→頭部の順で進行することが報告されています。このような加齢に伴う体温調節能の低下と同様に、運動に伴う骨格筋血流量増大も加齢により抑制されるか否かを本論文では検討しました。その結果、膝伸展運動時の大腿動脈血流量の絶対値は若年者よりも高齢者で低い値を示しましたが、骨格筋量で補正した大腿動脈血流量には高齢者と若年者と差がないことが明らかとなりました。また、若年者と比較して高齢者において、運動時の平均動脈血圧は高値を、一方、血管コンダクタンスは低値を示しました。これらの結果から、活動筋量が比較的少ない膝伸展運動時では、骨格筋量あたり的大腿動脈血流量は老化により抑制されませんが、大腿動脈血流量を保持するための規定因子は加齢により変化し、高齢者は減弱した血管コンダクタンスを大

きな昇圧応答で代償することが示唆されました。

科学技術の急速な発達とアメニティの追及に伴い、ヒトを取り巻く生活環境は大きく改善されている一方で、地球温暖化による気候変動も私たちの生活に様々な影響を及ぼしています。このように刻々と変化し続ける生活環境の中、さらには人生100年時代といわれる現代において、健康を維持し、生活の質を高める方法のひとつとして積極的な身体活動が推奨されています。高齢者の方が安全かつ効果的な運動を行なうための方策を考える上で、体温調節および循環調節に関する基礎的なデータを蓄積していくことは非常に重要であると考えられます。今回の受賞を励みに、今後一層、研究活動に精進して参ります。この度は誠にありがとうございました。

「論文奨励賞を受賞して」

林小百合(国立精神・神経医療研究センター)

この度は、JPA に掲載されました論文「[ERP study on the associations of peripheral oxytocin and prolactin with inhibitory processes involving emotional distraction](#)」に対し、2019 年度論文奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文を推薦して下さいました皆様に心から御礼申し上げます。

本論文は、ヒト女性の月経周期に伴うオキシトシン・プロラクチンの血清中濃度の変動と、幼児怒り顔による干渉効果の変化の関連を検討したものです。オキシトシンは、母性や社会性に関わることが知られるホルモンです。プロラクチンは、ヒト対象の研究は少ないものの、情動への影響や、オキシトシンの効果を高めることなどが報告されています。国内外の先行研究では、薬剤投与等によって強制的にホルモン変化を生じさせる実験が主流ですが、本研究

では、経口避妊薬等による人工的な制御を受けていないナチュラルな月経周期で生じるオキシトシンやプロラクチンの濃度変化を利用することで、内因性の変動の影響を観察しました。薬剤投与と比べると、血中濃度の変化は比較的小さく、結果が不明瞭な部分もありましたが、それでもなお、幼児の怒り顔提示時の行動抑制に関連する脳活動の一部(図1)は、ホルモンの月内変動と関連することを支持する結果を得ました。これらオキシトシンとプロラクチンの分泌が著しく高まる時期の一つとして、産後が挙げられます。現在は、本論文の成果が産後女性(母親)の認知特性の特徴を成す内分泌学的機序の一部といえるのか、そして、母親のみに見られる特徴はあるのかといった問いに答えるべく、後続研究の成果をまとめております。

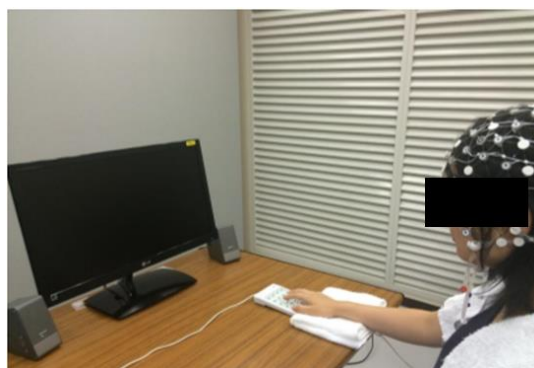


図1 脳波計測の様子

本研究は、自身の博士研究の一部として、九州大学大学院在籍時に実施したものです。九州大学芸術工学研究院の元村祐貴先生のご指導の下、同研究院の樋口重和先生、当時綿貫茂喜先生の研究室にて博士学生をされていた岸田文先生、学部・修士課程在籍時にご指導いただいたキム・ヨンキュ先生、そして樋口・元村研究室の皆様にご協力いただき、とても楽しく取り組ませていただきました。国や

文化、世代を超えて、ヒトが人を育てる営みの背景に共通した生理学的な機序があることは、私自身にとっては大変興味深いことで、生き物としてのヒトや哺乳類の面白さと奥深さを感じます。一方で、他の生体機能がそうであるように、何かのバランスが崩れてしまった際(孤立した育児によって過度な負担がかかってしまったなど)には、問題が生じる危うさをはらんでいるのではないかと思います。生理人類学の基盤の上に研究を進めることで、この点に切り込んでいけるのではないかと感じております。研究の解釈等によっては子育てに奮闘するお母さんたちを追い詰める危険性が近くにあることを胸に、研究の方向性を間違ふことなく、この受賞を励みにより一層精進する所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、採血や実験の安全面等でご協力いただきました福岡浦添クリニックの豊島秀夫先生、実験中の託児場所のご協力いただきました九州大学芸術工学研究院の藤智亮先生、そしてお忙しい中実験にご協力いただきました参加者の皆様に、この場を借りて改めて感謝の意を申し上げます。

■ Best Reviewer Award 受賞者の言葉

「Best Reviewer Award を受賞して」

石橋圭太(千葉大学)

この度は名誉ある Best Reviewer Award を賜り、大変ありがたく存じます。ご選考いただきましたご関係各位に御礼申し上げます。

私が査読を初めて担当したのは 20 年前になります。当時、Editor とのやり取りは郵送による紙媒体で行っておりました。締め切りが迫っているときには、夜中に中央郵便局へ書類を持ち込んで速達で依頼するということもありまし

た。今は、投稿から出版まで、すべてが Web 上で完結する時代となり、便利になったのは確かなようですが、締め切りの直前まで対応することができるので、却って忙しくなったように思います。

先日、アメリカの生理学会が主催する査読者を対象とした Web のセミナーに参加いたしました。システムティックに査読プロセスが構築されているのを目の当たりにして時代の変化を感じました。Annals of Human Biology の Editor をされていた Kenneth J. Collins 氏の回顧録 ([Collins KJ: Physiological variation and adaptability in human populations. Ann Hum Biol 1999, 26:19-38.](#))にあった、90 年代の Editorial のかつての様子と比べると隔世の感がありました。セミナーで伺ったところでは、現在、かの雑誌では第 1 段階で 15 名から 20 名の査読候補者にコンタクトをとるようで、このご時世、査読者を見つけるのはどこも厳しい状況にあるようです。

さて、雑誌ごとに投稿論文のリジェクト率に違いがあるように、査読依頼のリジェクト率も様々なようですが、一研究者内で投稿する数と査読を引き受ける数にバランスが取れていないと、どこかに皺寄せが来るようにも思います。学生の時には査読を引き受けることがほぼないことを考えると、生涯のなかでバランスをとる必要があるのかもしれません。そのように考えながらも、年齢を経るに従い査読は積極的にお引き受けしておりましたところ、図らずもこのような名誉ある賞をいただきました。皺寄せなどと考えていたことで罰が当たってもおかしくはなかったのですが、受賞という有難いお知らせを中村編集委員長から頂きました。

先日の授賞式でも申しましたが、[Journal of Physiological Anthropology](#) (JPA)の国際発信

力はますます高まっているようで、JPA の Web ページに賞の告知が掲載 (図 1) されて以降、Web of Science に収録されている他の雑誌からも査読を依頼されるようになりました。普段、チェックしていない雑誌にも関連する面白い論文がたくさん掲載されていることを知ることができて、Best Reviewer Award の副賞をいただいたような気持ちです。

最後に JPA のこれからの益々の発展を祈念して、筆をおきたいと思います。この度は大変ありがとうございました。

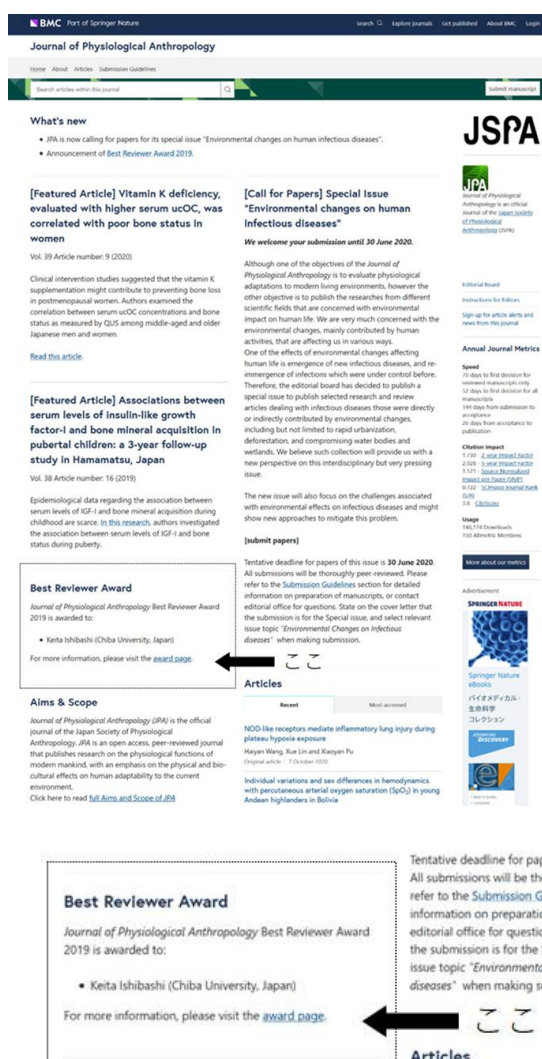
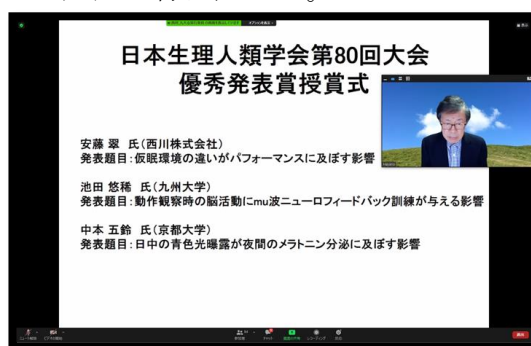


図 1 JPA の Web ページに掲載された Best Reviewer Award の告知 (枠線等一部加筆)

■第 80 回大会 (名古屋市立大学) 優秀発表賞受賞者の言葉

優秀発表賞の授賞式は通常、次の大会の懇親会で行われますが、今回は第 81 回大会 (長崎大学) が Web 開催となったことに伴い、オンラインで行われました。



優秀発表賞の授賞式の模様

「仮眠環境の違いがパフォーマンスに及ぼす影響」

安藤翠 (西川株式会社)

この度は優秀発表賞という栄えある賞を賜りまして誠に有難うございます。本研究が先生方に評価いただけたこと、大変嬉しく存じます。また発表当日は貴重なご意見を多くいただき、改めて発表の機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。

本研究の中で特に私が興味深く感じたのは「夜と昼の最適な睡眠環境は異なる」という点です。近年の仮眠ブームに伴い様々な仮眠施設が誕生していますが、単に快適に眠れるだけではなく、仮眠用の生理学に基づいた環境作りが必要なのではないかと感じています。

今回の研究では、全 4 条件 (「A.仮眠なし (読書)」、「B.オフィス想定」、「C.一般的な仮眠ルーム」、「D.環境制御型仮眠ルーム」) を用意しました (図 1)。それぞれ同じ時間帯に同じ長さの仮眠をとり、その後の客観評価 (集中力・作業効率) 及び主観評価を比較しました。

「C.一般的な仮眠ルーム」は、消灯・静寂条件で、夜の睡眠環境として最もお勧めできる環境です。もちろん仮眠なしの条件よりも測定結果は良好ですが、特に集中力や主観評価の点で、「D.環境制御型仮眠ルーム」のほうが優れている傾向が見られました。これは、「C.一般的な仮眠ルーム」は仮眠時に深く眠りすぎてしまう為に、起床後のパフォーマンスを下げしてしまうことが原因と思われます。また、今回の試験ではあくまで活動期のパフォーマンスへの影響に着目していますが、夜の主睡眠への影響を確認すれば、「C.一般的な仮眠ルーム」と「D.環境制御型仮眠ルーム」の差は更に顕著になることが想定されます。

A. 仮眠なし(読書)

B. オフィス想定



C. 一般的な仮眠ルーム

D. 環境制御型仮眠ルーム



図1 仮眠環境条件

今回の試験は、実際に企業で働くオフィスワーカーを対象としております。私自身も昼食後の13~15時頃は睡魔と闘うこともあり、作業効率が落ちていることは自覚しておりました。そこで、弊社内に作ったこの環境制御型仮眠ルームで15分間の仮眠をとるようにしました。その習慣を取り入れ始めてから、午後パフォーマンスを落とさずに仕事に励むことが出来るようになりました。最近是在宅勤務の際には、環境制御型仮眠ルームの環境を真似て自宅でも

取り入れることで、パフォーマンスを維持しています。

仮眠習慣は今後、企業だけでなく学校や病院等でも広く取り入れられるべきだと考えています。勤勉な日本人ですが、まずは仮眠が当たり前となるような風土づくりをすること、そして、その効果を最大限に発揮できるような仮眠環境を整えることが求められると考えています。

弊社の環境制御型仮眠ルームの概要は[こちらのページ](#)にございますので、ご興味があればご覧ください。このルームは社内では「ちょっと寝ルーム」の愛称で親しまれており愛用者も多くおります。

最後に本研究を進めるにあたり、ご指導いただきました三輪恵美子先生ならびにご協力をいただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

「動作観察時に行うmu波ニューロフィードバック訓練の効果検討」

池田悠稀(九州大学大学院芸術工学研究院)

この度は、優秀発表賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄でございます。第80回大会で発表いたしました「動作観察時の脳活動にmu波ニューロフィードバック訓練が与える影響」は、博士研究の一部をまとめたものでした。受賞に際しまして、ご指導をいただきました樋口重和教授、研究室の皆様、実験参加者の皆様に、厚くお礼申し上げます。

ミラーシステムの活動は様々な観察刺激や観察態度によって変化することが知られていますが、活動が高いことが動作観察にどのような意味を持つかは明らかではありません。本研究では、自分自身のミラーシステムがどの程度賦活しているか知りながら、なるべく活動が高くなるように動作を観察してもらうニューロフィー

ドバック訓練を行いました。その結果、ミラーシステムの活動に関しては、繰り返し同じ動画を観察することによって生じる脳活動の低下が、フィードバック訓練後に抑制されることが示唆されました。

今後はこのフィードバックシステムの改良をしつつ、動作観察やミラーシステムについての理解が深まるような研究をしていければと考えております。賞をいただいたことを励みに、今後より一層精進してまいります。

「日中の光環境が夜間のメラトニン分泌に及ぼす影響」

中本五鈴(京都大学大学院医学研究科)

この度は、優秀発表賞という名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に思います。発表当日は、多くの先生方から重要なご指摘やコメントを頂きましたこと、誠にありがとうございました。今回の受賞を励みに、今後の研究活動により一層励んでいく所存です。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

光は、概日リズムの最も重要な同調因子であり、その中でも照度、光の曝露する時間帯、曝露時間、波長が重要な要素です。波長に注目すると、青色光が最も影響が強く、夜の青色光曝露がヒトの概日リズムを後退させ、逆に、朝の青色光曝露は前進させることが報告されています。日中の光曝露が概日リズムを前進させることが報告されていますが、日中の青色光曝露の影響は明らかになっていません。そこで、本研究では、日中の青色光曝露が夜間のメラトニン分泌に及ぼす影響を明らかにすることを目的としました。

青色光と赤色光の2条件で、2泊3日の宿泊実験を実施しました(図1)。青色光では赤色光と比較して、直腸温最低値の出現時刻が

有意に前進しました。メラトニン分泌開始時刻(DLMO)には両群で有意な差はありませんでしたが、効果量が中程度(0.76)であったことは、直腸温の結果を支持していました。日中の光曝露は、概日リズムの調節に重要であり、赤色光よりも青色光の影響が大きいと考えられました。概日リズムを調えるために、朝と夜の青色光に注目されることが多いですが、日中の青色光曝露も重要です。青色光は太陽光に含まれており、24時間社会となった現代で、日中に太陽光を浴びることの大切さを再度認識しなければならないと考えています。

最後にはなりますが、指導教員である京都大学若村智子教授、計画から実施まで一緒に研究に熱心に取り組んでくれた研究室の後輩である石黒さん、石田さん、繁田さん、中村さん、長谷川さんに心より感謝申し上げます。

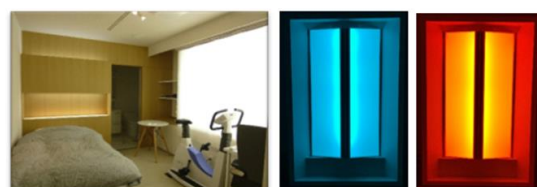


図1 実験室内(左)とし使用した光源(右)

■第81回大会(長崎大学)報告

大会長 田井村明博(長崎大学)

第81回大会は、新型コロナウイルス感染防止の観点から、当初の5月開催予定を10月開催に延期させていただきました。その後のコロナ禍の状況により最終的にオンラインで開催することを決定させていただき、無事に大会を終了いたしました。

当学会として、初めてのオンライン開催であったため、演題発表者、参加者がどの程度になるかの予想も難しく大変心配しておりましたが、演題受付を延長することなく、195名(協賛3社含む)の方々にご参加いただきました(表

1)。また特別講演、シンポジウム、一般発表（口頭／ポスター）で合計 61 演題をご発表いただき、活発な質疑応答が行われました（表 2）。ご発表、ご参加いただきました全ての参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。

表 1 第 81 回大会の参加者状況

参加者内訳

会員種別	参加者数
正会員	112
学生会員	49
名誉会員	3
招待者	3
非会員	10
学生非会員	15
協賛企業	3
合計	195

表 2 第 81 回大会の演題発表状況

演題内訳

発表形態	演題数
特別講演	1
シンポジウム 1	4
シンポジウム 2	4
一般発表 （口頭発表）	17
一般発表 （ポスター発表）	35
合計	61

本報告では主に「オンライン開催」について報告させていただきます。初めてのオンライン開催でしたが、これまでの通常の大会よりも多くの方々に参加いただき、大きなトラブルもなく開催できました要因として、以下のことが考えられます。

① 5 月に開催されました 2020 年第 1 回理事会で、通常開催の準備と平行して「Web（オンライン）開催」についても検討するようご助言をいただきました。早速、オンライン開催の検討

WG を立ち上げ、「参加者の移動、参集以外は、従来の対面での開催と同じ内容、流れで開催すること」を実行委員会で共有し、検討した結果、7 月下旬にはオンライン（ハイブリッド型も含め）での大会開催が可能であることを確認できたこと。

② オンライン開催に必要なシステムに関しては、学会開催支援会社にもご提案をいただきましたが、実行委員の先生で既にオンライン学会運営、参加経験者がおられたこと、オンライン開催で使用するシステムに関しては、実行委員のほとんどが日頃から教育研究活動においてオンライン授業、オンライン会議での使用経験があったことから、最終的にインターネット上で提供されているフリーのシステム（「Zoom」、 「Slack」および「WiX」）での運用が可能であることを確認できたこと。

③ 開催時期が 10 月に延期されたことで、ほぼ全ての参加者の皆様が日常においてもオンラインでの教育研究活動を経験されていたこと、さらに、大会前日に行われたフロンティアミーティングに学会大会参加者の多くの方が参加されたことで、あらかじめ、基本的な Zoom システムの操作等をご経験いただけたこと。

④ 大会スケジュールについては、従来の日程に準じて設定しておりましたが、参加申し込み後にオンラインシステムへのアクセスや使用方法などのアナウンス、概要集の事前送付、そして当日参加者への対応など、オンライン開催で行うことにより新たな問題が生じることが事前に確認できました。概要集の編集、印刷そして事前送付のスケジュールを実行委員で共有し確実に進めるとともに、口頭発表者には事前に接続テストを、ポスター発表者には事前にポスターと 1 分間フラッシュトーク用のファイルの提出をいただくといった参加者の皆様のご協

力により、大きなトラブルもなく研究発表を行うことができたこと。

⑤ 特別講演、シンポジウム、一般口頭発表においては、Zoom システムを利用いたしましたが、質疑応答も含め、対面での発表とほぼ同じように実施できたこと。

⑥ ポスター発表では、過去の大会でも行われてきました「1 分間フラッシュトーク」を Zoom システムで、ポスターの掲示と質疑応答は Slack システムで実施しましたが、チャット機能を利用したテキストベースの質疑応答で、極めて活発な質疑応答が行われたこと。

以上、他にも要因はあると思われますが、本学会の大会参加者数であればオンラインでの開催も大きな問題なく行えることがわかりました。

本大会を無事に終えることが出来たのは、大会担当理事の若林 斉先生(北海道大学)、西村貴孝先生(九州大学)はじめ、大会実行委員の李 相逸先生(北海道大学)、石橋圭太先生(千葉大学)、向江秀之先生(豊田中央研究所)、小原久未子先生(近畿大学)、小崎智照先生(福岡女子大学)、元村祐貴先生(九州大学)、本井 碧先生(九州大学)、飛奈卓郎先生(長崎県立大学)に大変なご尽力を頂いたためです。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

■第 82 回大会(東都大学)案内(第 1 報)

大会長 佐藤香苗(東都大学)

今もって、COVID-19 のパンデミックは私たちの生活に大きな変化をもたらしています。緊急事態宣言が発令された 2020 年 4、5 月には、学校教育が停止するという未曾有の事態となり、感染症が蔓延する中、外出制限や在宅勤務など、社会的距離の確保による健康影響も懸念されています。しかし、感染拡大の防止のた

めには、新しい価値の創造や行動様式が求められます。

そのような中、日本生理人類学会として、はじめてのオンライン開催となった第 81 回大会が田井村明博大会長はじめ実行委員各位の熱心なご努力により成功裏に終了しました。感染症の終息の見通しが立たない状況に鑑み、大変残念ではございますが、第 82 回大会も第 81 回大会のノウハウを継承し、下記会期・運営本部にてオンライン開催とさせていただきます。

「新しい栄養学研究への挑戦：基礎と実践 科学の環(わ)」をメインテーマに、特別講演、教育講演、安静時代謝量に関するシンポジウム(座長：九州大学 前田享史教授)、ポスターセッション等を企画しております。そのうち、今回は教育講演についてご紹介させていただきます。東京大学・総合研究博物館の米田穰教授に「ヒトの食生活をめぐる最近の話題」についてご講演いただきます(座長：北海道大学 山内太郎教授)。ヒトの食生活は非常に多様ですが、その時代変遷については不明な点が多いのが実際です。調理を含めた文化的な要素の適応結果と考えられますが、食文化は、自然の気候風土、社会的環境によって形成されるため、地域的あるいは民族的・文化的特徴をも有し、ヒトの生理の進化にも影響していると考えられます。本講演では、古人骨の同位体分析による食性復元を中心にヒトの食生活の時代変化についてご紹介いただきます。食のグローバル化が進展する現代だからこそ、古代人の食生態から多くのことを学べるものと期待いたします。

さらに、初日のフロンティアミーティングをはじめ、学会企画を盛り込み、充実した大会となるよう努める所存です。詳細につきましては、

今後、随時お知らせしてまいります。皆様には多々ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、どうかご理解の上、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

運営本部: 学校法人青淵学園深谷キャンパス
2号館(深谷市上柴町西 4-2-7)



第 82 回大会の運営本部

【記】

会期(予定):

2021 年 10 月 29 日(金)～ 31 日(日)

大会長: 佐藤香苗(東都大学)

実行委員長: 高雄元晴(東海大学)

スーパバイザー: 前田享史教授(九州大学)、
山内太郎教授(北海道大学)

■学会動静

一般社団法人日本生理人類学会代議員ならびに役員候補者選挙の開示(2020 年 12 月 14 日)

1 月 7 日(木)代議員選挙開始

2 月 25 日(木)理事候補者・監事候補者選挙開始

3 月 19 日(金)会長候補者・副会長候補者選挙開始

4 月 8 日(木)選挙結果告示

編集後記

第 30 巻第 3 号はいかがでしたでしょうか。今号は大勢の受賞者のお言葉と第 82 回大会の開催案内を掲載することができ、大変賑やかな、そして希望あふれる内容とすることができました。COVID-19 の感染拡大からおおよそ 1 年が経過しつつありますが、第 81 回大会報告は今後の大会運営にとっても非常に心強い記事になったと思います。「生理人類学あれこれ」への議論や、2020 年 11 月に理工図書から発刊された教科書「生理人類学―一人の理解と日常の課題発見のために―」の書評など、会員のみなさまからの積極的な投稿をお待ちしております。(下村)

次号予定

第 82 回大会(東都大学)案内(第 2 報)、私の生理人類学、研究満喫など
2021 年 3 月末原稿締切

PAnews 編集事務局

下村義弘(千葉大学大学院工学研究院)

shimomura [at] faculty.chiba-u.jp